

【巻頭言】

被服衛生学の未来への願い

久慈るみ子

尚絅学院大学総合人間科学部環境構想学科

被服衛生学第 38 号は、平成最後の号となります。昭和に偉大な先達である恩師の先生方が被服衛生学部会を立ち上げ、3 つ目の元号を迎えることとなります。被服衛生学部会発足当時大学生だった私が定年までの年月を片手で数えられる年齢となり、このお役目が回ってまいりました。僭越ですが、ペンをとらせていただきます。

思い出の中に、被服衛生学に関わる生活の変化がありました。実家がある青森県八戸市、子供のころの八戸の冬は寒く、今に比べると室内でも厚着でした。当時のストーブは「暖房」というより「採暖」と考えた方が良かったかもしれません。また冬にスケート等の外遊びをするときはマスクもつけていました。秋が深くなる頃から春の訪れまでは、毛糸の帽子や手袋が毎日の寒さから、からだを守ってくれました。被服衛生的にみると、衣服の保温効果を十分に活かしていた時代です。一方夏には綿サッカー生地ワンピースを思い出す先生方も大勢いらっしゃると思います。衣生活が理論的に解明され、さらに現在は衣服の新たな可能性を求め研究が進められています。

一方、大学から家政学分野が縮小していく時代となりました。残念ながら私の所属学科も来年度から科研費の中区分である社会学及び関連分野と同じく社会学系の人文社会学群人文社会学類に組み込まれることになりました。しかし、これを機に幸いなことも始まりました。過日「災害研究の交流会」なるものが学内関係者により開催されました。専門分野が異なる同僚たちが各自災害研究に関わった成果の簡単な報告を行い、共同研究の可能性を探っていくことになりました。また、その翌日には新設する学群・学類の設置記念講演会で SDGs の中から「飢餓をゼロに、質の高い教育をみんなに、再生可能エネルギー、エネルギーをみんなにそしてクリーンに、すみつづけられるまちづくり、つくる責任つかう責任、気候変動に具体的な対策を、陸の豊かさを守ろう」の 7 項目を

取り上げ、参加型の講演会を行いました。7 つのテーマごとの円卓に学生(含他大学)、教員、地域の NPO、行政、企業の方々とともに座りグループディスカッションを行ったのです。現代社会は多くの課題を抱えています。これらの問題は一見被服衛生学分野と関係ないように見えますが、話し合いのどの円卓においても衣生活を含むライフスタイルの問題が存在し、家政学、被服衛生学分野が新たな一歩を踏み出す種を拾ったように感じました。例えば私が座った円卓は飢餓の問題がテーマでした。「飢餓」はパソコンに向かって「きが」と打ち込んでも、私のパソコンの学習機能では 4 候補目あたりにやっと出てくるくらい、幸いなことに日常にないものです。しかしこの円卓のコーディネーターはこども食堂の方でしたが、1 日 1 食しか食べ物を口にできない子供やその親がいる現実を話題とされました。一方現代社会は食も衣も過度な生産、製品化が存在します。円卓でのディスカッションは貧困の問題から、農薬やプラスチックによる海洋汚染の問題へと広がりました。そこには経済的な貧困だけではない、教育、ライフスタイルなど様々な問題が浮上したのです。

世界が持続可能となる社会の実現に向けて解決すべき問題が山積している中、家政学、そして被服衛生学もまた次のステージに向かっているのかもしれません。古い言い方ですがピンチはチャンスです。社会的に見たら被服衛生学はどのようなことを求められ、何をなすべきか、現代社会が抱えている新たな課題を発掘し、被服衛生学部会が未来へと進むことを願ってペンを置きます。

<連絡先>

〒981-1295 宮城県名取市ゆりが丘 4 丁目 10-1
尚絅学院大学総合人間科学部 久慈 るみ子
電話：022-381-3360
e メール：kuji@shokei.ac.jp